

歴史と文学

——歴史小説についての一考察——

佐々木 徹

歴史小説を評価するに際して、小説をもとにして映画を製作するアダプテーションとの比較は有用であろう。歴史小説と歴史の関係は、映画と原作の関係に似ているように思われる。可能性としては何でもありで、素材をどのように料理するかはまったく作者の自由である。歴史的事実、あるいは原作に対して忠実なやり方もあれば、大胆に手を加えるやり方もある（そこが歴史と文学の違いだろう）。ただ、いずれにせよ、アダプテーションを正当に評価しようと思えば、映画も原作も両方勉強しなければならない。小説なら原作1冊を読めばすむのだが、歴史の勉強はもっと大変な作業である。したがって、歴史小説の評価は非常にしんどい仕事になる。

近年非常に話題になったヒラリー・マンテルの『ウルフ・ホール』（2009）の書評においてステイーヴン・グリーンブラットは、この作品のように歴史的人物を主人公にした作品こそが本格的な歴史小説である、という旨を述べている。これが本当かどうかはわからないが、仮にそうだとすると、本格的な歴史小説を書くにはシェイクスピア並みの才能が必要になる。マンテルはすべての出来事をトマス・クロムウェルの意識を通じて語るという手法でその難業に挑戦したが、これとは対照的に、ゴア・ヴィダルは『リンカーン』（1984）において主人公の内面を一切見せずに外側からのみ描いている。どちらもすぐれた

小説ではあるが、僕としては、相当歴史を勉強した結果、どちらも「歴史其儘」(森鷗外)で十分おもしろいものがさらにおもしろくなったかというと決してそうとは言えず、前者はアン・ブリン処刑にまつわる歴史的事実に奇妙にウェル・メイドな「形のよさ」を付与し、後者は奇妙な「形のよさ」を持つリンカーンの伝記的事実を生かしきれなかったという理由により、ともにAマイナスと判定したい。